2010年8月23日（月）13:30-16:00
2010年度ＪＬＡ中堅職員ステップアップ研修（2）
領域：トピック

「図書館史」を準備する

横浜女子短期大学図書館
奥泉　和久

目次

０　はじめに
自己紹介　本日の進め方　並びに「図書館史」にかっこを付した理由　研修の目的

１　準備の前に　【課題の提示1】
１－１　きっかけは？　資-1
１－２　どのように、「年表」をつくったのか
１－３　「年表」を作成してみて感じたこと（課題）　資-2、3

２　図書館史とはどのようなものか　【課題の提示2】
２－１　図書館史研究の動向
２－２　図書館史研究方法論　石井敦氏の場合　資-4、5

３　「図書館史」をどのように準備したらよいか？　【課題を克服するために】
３－１　「図書館史」はどのように構成されているか
３－２　目的の明確化
３－３　歴史にどう向き合うか　資-6、7
３－４　資料について　資-8
３－５　どこからはじめるか！　資-9-12

４　おわりに

資料編

０　はじめに

自己紹介　本日の進め方　並びに「図書館史」にかっこを付した理由　研修の目的

自己紹介

併せて、私の「自己流」図書館研究（？勉強）法。
スタートは、ビリの図書館をどうするか！

本日の進め方

「図書館年表」（以下「年表」）を昨秋刊行した。これが「トピック」にしていただいた理由？　しかし、「年表」だけではやることが限定されるので、広く図書館史を対象にすることとした。図書館史の年表は、図書館の歴史研究の表現方法のひとつと考えられるので、ここではまず「年表」作成の経緯や意義についてふれる。次に、図書館史の課題を検討する。その上で、「図書館史」の課題をどのように克服するかを考える。

「図書館史」とかっこを付したわけ

一般に図書館史という場合、ＡとＢとに大別できよう。そのちがいは何か？

Ａ　「○○図書館に関する歴史研究……」
Ｂ　「○○図書館○○年史」（以下「館史」）

Ａは、研究者によって書かれる研究書。目的は研究であり、読者を研究者とし、研究者の独自の観点で歴史が検討される。

Ｂは、多くは○○周年といった記念行事の一環として取り組まれ、図書館員などによって書かれる個別の図書館史のことで、図書館員、利用者を読者に想定。一般書として扱われ、客観性な歴史記述が期待される。

以上のように、執筆の動機、目的、対象となる事象の範囲、分析の仕方などもことなる。そこで、この研修で図書館史を話題にする場合、一般の図書館史ではなく「館史」を念頭に置いた方がよいと考えた。

研修の目的

図書館史研究の課題を明らかにし、図書館員が仕事の延長として身近に「図書館史」について考える機会をもてるようにする。そのためには、まず数多くの文献にふれることが必要。そこで、年表を読み、資料を読むことからはじめる。その後、「館史」を構想する際の課題について検討する。

注　ここで、図書館というときは、すべての館種を含む場合と公共図書館をさす場合があるが、それ以外の館種をいう場合は断る。また、日本図書館協会のことを協会という。

１　準備の前に	【課題の提示 1】
１－１　きっかけは？	
１－２　どのように、「年表」をつくったのか	
１－３　「年表」を作成してみて感じたこと（課題）	

「年表」を実際に作成した体験をもとに、その経緯と意義について述べる。「年表」は、歴史を表現する手段のひとつであり、「年表」の内容を検討することは、歴史を構成する要素を知ることに通じると考える。

１－１　きっかけは？

図書館史に付されている「年表」は、多くの場合、本文の記述とは従属する関係にある。脇役に徹し、本文を支え、一覧性、索引的な役割などが期待されている。報告者は、これまでに次のような年表を執筆した。**【資料１】「年表」の書式**（Ａ・Ｂを掲載、Ｃは【資料２】以下を参照のこと）

Ａ『近代日本図書館の歩み　日本図書館協会創立百周年記念』日本図書館協会　1992-93
　地方篇－ 旧植民地を含む全県「年表」　２段組－各県平均２～3p 前後
　本篇－日本図書館協会「年表」　２段組－ 62p
Ｂ「年表　日本編」『図書館ハンドブック　第６版』日本図書館協会　2005（補訂版　2010）
　55p
Ｃ『近代日本公共図書館年表』日本図書館協会　2009　467p

Ａは、地方篇－県別（公共・大学・短大・専門・学校などで構成）と本編－日本図書館協会（国立・館界・一般）の２分冊。Ａは、本文の記述の付録的位置づけ（妥協の産物？）。だが、裏づけをとる大変さなどを体験。Ｂはこれまでの蓄積あり（「協会○○年史」）。

Ｂ、「第５版」（石井敦氏執筆）を継承しつつ加筆（日にちまで記入、利用者の視点を重視（開館日の扱い）、サービス、運動を意識的に項目化など）。2005 年はＣの作成途中だった。

１－２　どのように「年表」をつくったのか？

Ｃは、独立した年表。昨年９月に刊行。公共図書館中心、他の館種、協会などは館界に収める。大部なだけに企画、構成力なども問われる。基本的には、Ａの年表を統合して、大幅に加筆修正し、編集し直したもの。

ここでは「年表」について、「年表」作成の目的、図書館史研究に対する姿勢とともに作業の特徴について紹介する。

（１）年表の構成

本表、資料（典拠文献一覧など）、索引からなる。本文は、2005年までの事項を収録し、コラム、写真・図版を多数配した。

本表

「公共図書館」「館界」「一般事項」の３つの欄に項目を振り分け、項目間の関連性を表現しうるようつとめた（「欄」を超えた相関関係が認められるようにすること）。時期ごとに区分し、それぞれの時代の理解のために解説を付した。

資料

典拠文献により、項目化した事項を裏づける資料を明らかにした。大部ゆえ、索引は必須の条件。適宜参照を付した。

写真、図版、コラムなど

時代を理解するためには、さまざまな方法を用意しておいた方がよい。写真、図版などは、視覚に訴える力が大きいこと、「コラム」で、年表（項目により事実を把握する方法）の限界を補強した。

（２）年表の作成方針、方法など

ほしい資料をどのようにして入手するか。入手しやすい資料に頼らず、必要な資料をさがすことが大事なこと。たとえば、大規模館の「館史」は多く見受けられるが、町村立図書館の「館史」はそれほど多くない。小・中規模の図書館の資料をできる限りさがすことによって、大図書館中心主義に陥らないことを心がけた。県立図書館など大規模な「館史」には、自館の記録に加え、県内の図書館を記述するものがある。ただし、ほとんどは開館に関することのみ。

表記方法の統一

サービスなどに関する表記を統一すると、わかりやすく、索引も容易になる。しかし、歴史性を損なうことにもなる。たとえば、開架。「開架」とするだけの場合もあるが、できるだけ呼称の経過のとおり、そのまま「安全開架（接架）」「公開書架（書庫）」「自由開架（接架）」など、典拠文献に掲載されたとおりを記した。

（３）項目の採録の基準、収録範囲など

「項目」には何を盛り込むべきか。もしくは、選ばないか、との単純ではあるが、やっかいな課題がある。歴史的事実を「正当」に評価をすることこそが基本的な作業。したがって、項目を選択すること自体が評価を意味することになる。

選択基準の設定

これに基準を設けることは案外むずかしい。次のような事項についてはできるだけ多角的な視野をもち、「通史」が書けるくらいに内容を充実させる必要を感じた。

・サービスの変遷（貸出方法、閲覧方式、開館時間、広域化、相互利用……）
・児童サービス、障害者サービス、レファレンスサービスなどの個別サービス史
・図書館運動（教育会、青年会、子ども文庫など）
・図書館法規、図書館の自由、図書館用品などの関連事項
・図書館関係図書・雑誌、論文などの著作物
・「図書館報」、「図書館協会（協議会）報」など図書館、図書館関係団体の発行物
・図書館人・関係者、図書館団体など

収録範囲

どの時代にどのくらい（分量を）収録するかが案外むずかしい。年ごとにバランスを取りたくてもそれは困難。活発な年とそうでない年があるから。また、現代は、項目数（分量）が多い割に、歴史的な重要度が必ずしも高くない。加えて、現代については評価が定まっていないなど「現代史」研究の課題がつきまとう。収録範囲は広いに越したことはないが、現在に近くなるに従って負担は増大する。

公共図書館以外の館種に関する事項を豊富にすることによって、内容の充実をはかる。本書の場合、十分とは言えないまでも、これらに加え情報サービスに関連する事柄、関連の事項などもできるだけ収め、相関性についても検討した。

（４）典拠文献の特定

全国の活動を対象とした独立した「年表」の場合、とくに地方の資料収集には限界があり、二次的な資料に依拠せざるを得ない（ここで二次的な資料とは、「〇〇図書館〇〇年史」などをさす）。これまでの図書館史研究の成果を踏まえる点から、地域図書館史の研究資料は可能な限り使用（紹介）した。

文献の選択

一次的な資料（ここでは、文書などに限定しない）がのぞましいが限界がある。それでもあらたな資料の発掘の可能性を追究すべきであろう。『年表・北海道の図書館』は、『函館図書館年報』など一次的な文献が多く使用されている。

文献の明示

根拠を明示することは、ある項目について、その成立や活動内容などにいくつかの説がある場合、これを特定する根拠となる。後から学ぶ人がさらに研究するための材料を提供することになる。誤記の確認もできる。

１－３　「年表」を作成してみて感じたこと（課題）

独立した「年表」を作成する場合、長い時間を要する。作成している間に、時代が動き、また、自分も変わる。考え方は揺れ動き、調査が行き詰まったりもする。それを幾度も立て直しながら進めることが求められる。これは付録としての「年表」との最も大きな違いか。

（１）ストーリーを描けるか

「年表」にもストーリーが要るのではないか。事実を羅列したような「論文」の悪口を「まるで年表みたいだ」と言ったりする。「年表」は、本来それだけのものに過ぎないのであろうが、どうもそれだけではないようにも思える。

（２）１つの項目が問われ、同時に総合力が問われる

年表を転記すれば新たな年表ができるものではない。何がわかっていて、何がわかっていないかを知り、わからないことを調べ、項目化するのが年表作成の基本。たしかに、資料から事項を拾って、「年表」の上に項目として落としていくこともある。しかし、それだけではなく、それとは別に、個々のサービスや歴史的な事象について、それぞれにすべて詳細とは言わないまでも、個別の「図書館史」を構成し、それをもとにして、項目化する気持ちで作業をすべきだと考える。

（３）作業の副産物というべきか、課題というべきか

年表の作成には、図書館史研究の成果を反映させるべき。作成者にはそれだけの研究態度が求められる。 図書館史研究の到達点ではないか。「年表」の課題は、図書館史の課題でもあるのではないか。

○ストーリーは描けたか？

○年表は、一つの項目につき、数行で表現する。

○事実の特定のむずかしさ。

○個別サービス史の充実が必要。

○中小図書館の歴史がどのように展開したのか。

○地域に資料がある！　はず。調査の限界を痛感。

○現代の項目の重要度の判断。地域、サービスの掘り起こしの不足、相関性の不十分さ。

○項目間の影響関係をどのように表現するか、限界あり。

例　参照を付したりもするが、それも程度がある。**【資料２】東京市立京橋図書館関東大震災の前後**

○図書館運動やサービスがどこではじまり、それがどのように広まったのか、追究は十分だったのか。**【資料３】「中小レポート」前後**

２　図書館史とはどのようなものか　　【課題の提示２】

２－１　図書館史研究の動向

２－２　図書館史研究方法論　石井敦氏の場合

２－１　図書館史研究の動向

論文を作成する場合には、先行研究批判をしてオリジナリティを明らかにする。「館史」の場合は、その必要はないが、これらに匹敵する作業をする必要はあるのではないか。さまざまな文献にふれ、図書館史がどのように書かれてきたのか、注目すべき点は何かなどを検討する。自館の個性、独自性を知る上でも参考になる。図書館史研究の文献のレビューからは、これまでの研究動向がわかる。ここでは、1980 年代の永末十四雄、2000 年代の三浦太郎によるレビューを見ておこう。

（１）永末十四雄による文献レビュー

永末は、1986 年に地方公共図書館史研究の動向を取り上げ、図書館史研究に関して、問題意識を明確にすることが重要だとし、それにはテーマを設定し、分析し批判することが不可欠だと述べた。（永末十四雄「日本における地方図書館史研究の動向と課題」『図書館文化史研究』No.3，1986，p.1-8.

（２）三浦太郎による文献レビュー

近年の研究動向については、三浦太郎による研究文献レビューがある。三浦は、2002 年から 2008 年までの国内で発表された文献を、研究対象によって 3 つに整理した。永末のレビューと比べると、この 20 年の間に研究のテーマが深まり、より専門性が高まり、学際的傾向、さらには図書館の低成長時代における研究の意義なども論議の対象となり、研究内容が多様化していることなどがわかる。（「カレントアウェアネス・ポータル」入手先（http://current.ndl.go.jp/ca1673）〈参照 2010-8-8〉）。

> 日本における近年の図書館史研究には顕著な特色が 3 つあると考えられる。それは、(1) 図書館史研究の方法論的な問い直し、(2) 日本の戦後図書館史の位置づけ、そして、(3) 人物への注目である。1990 年代以降、図書館政策の転換や法制度の改変、利用者構造の変化など、図書館が急激な転換を求められるようになる中で、その存立基盤が歴史的に捉え返されている。発展過程の枠組みが改めて問われるようになり、とくに現代と直に結びついた戦後史への注目が高まっている。また、戦後図書館の内部で現実にサービスを担った人びとの役割が見直されるなど人物研究が活発化し、これが歴史文書・文献の総合的な解釈を土台とした人物史への着目……（中略）また各図書館が編纂した館史や、書誌学、歴史学、教育学等の隣接領域の関連研究については含めていない。（三浦太郎「研究文献レビュー：図書館史」『カレントアウェアネス』No.297，2008，p.14-19.）（傍線奥泉、以下同様）

２－２　図書館史研究方法論　石井敦氏の場合

石井敦氏は、公共図書館員として仕事をしながら、図書館史研究の新たな方法を開拓した。ここでは、図書館現場において図書館員自らがいかにして問題意識をもち、研究に取り組んだらよいか、を考えてみた。ここでは３つの仕事に注目してみたい。

① 1957年の『神奈川県図書館史』の作成。館員として「館支」作成に携わる。

② 1960 年、日本図書館協会・中小公共図書館運営基準委員会委員（～ 1963 年）。委員のひとりとして調査、公共図書館の転機に重要なレポートを書いた。

③ 1972 年、『日本近代公共図書館史の研究』（日本図書館協会）刊。働きながら、研究を継続した成果。

石井敦氏（1925-2009）略年譜

1952（昭和 27）年４月　社団法人日本図書館協会事務局（～ 1954.3）
1954（昭和 29）年７月　神奈川県立図書館　→　1959 年 11 月、神奈川県立川崎図書館
1963（昭和 38）年３月　『中小都市における公共図書館の運営』（日本図書館協会）刊
1972（昭和 47）年２月　『日本近代公共図書館史の研究』（日本図書館協会）刊
1973（昭和 48）年 10 月　『図書館の発見』前川恒雄氏と共著（日本放送出版協会）刊
1975（昭和 50）年３月　神奈川県立川崎図書館退職
　　４月　東洋大学社会学部教授
1995（平成７）年３月　東洋大学社会学部退職

（１）『神奈川県図書館史』

約９年かけて、神奈川県図書館協会編『神奈川県図書館史』（神奈川県立図書館　1966）を完成。そのプロセスは次のとおり。館界からは高い評価を受けた。石井氏とともに、図書館の変革期に精力的に活動した館員による成果。

1957.7　県の図書館員研究会のなかで公共図書館史研究を目的にグループ結成
1959　略年表作成　／1962　神奈川県図書館協会のなかに図書館史編集委員会
1963　執筆の分担（８名）を決める　／　1964　草案　／　1966.3　脱稿

歴史というからにはまず問題意識にしたがって対象が選択され、分析し批判し総合化する過程を経なければ、単なる事象の羅列におわってしまう。「館史」の多くは図書館史研究としての条件を満たしきれず、その素材となるにとどまっているのも少なくないが、沿革誌の域を超えたものがある。その筆頭……『神奈川県図書館史』（昭和 41 年）で、石井敦氏をはじめ戦後派の中堅図書館員が総合研究の結果を分担執筆したものである。時代区分と図書館の類型、図書館運動の主体、図書館普及と運営形態、図書館人の列伝など歴史的諸要素を分析し総合化したはじめての本格的な地方図書館史である。（永末、前掲誌，p2）

（２）『日本近代公共図書館の研究』

石井氏は、図書館運動の指針を歴史に求め、歴史の経験に学ぶことができるとする。収録された論文は 1953-68 年に執筆したもの。

> 現場に働いていて研究のための時間をもてない一人の図書館員が、それでも、自分の館を含めて、日本の公共図書館をどうしたら発展させることができるか、そのための運動の指針を求めずにはいられなかった……。
>
> 問題意識の問題……それらの方法はどんな理念なり状況の中から生れてきたか、をみてゆく……日本の公共図書館もすでに 100 年近い歴史がある。この経験の中から汲みとるべきものは、無限であるといってよい。それがたとえ、否定されるべきものであったとしても、現在への強い戒めとなるだろう。（石井敦「あとがき」『日本近代公共図書館の研究』日本図書館協会，1972，p.336-337）

図書館員が、「どこをどうしたら日本の図書館は変わるのか」を考えるには「今の図書館を駄目にしている原因を探っていかなければいけない」。そして、重要なことは「図書館の本質の究明」によって「人類の社会の中で図書館というのは一体何なのか、どういう意味をもつのか」（石井敦「わが国の図書館史研究について」（シンポジウム・図書館文化史研究の回顧と展望）『図書館文化史研究』No20，2003，p.16-17.）を明らかにしていくこと。これが石井氏にとっての歴史研究の本質であった。

（３）「中小レポート」から何を学ぶか

「中小レポート」とは、『中小都市における公共図書館の運営』のこと。日本図書館協会のなかに、1960 年 10 月、中小公共図書館運営基準委員会が設置された。石井氏はそのメンバーのひとり。現場における問題を討議、調査、研究を重ね、報告書を発行。この国の従来の図書館観を大きく転換させた。**【資料４、５】「中小レポート」の普及の契機**

> 山口［源治郎］：……中小レポートが果たしてきた役割、それから問題点も含めて……。
>
> 石井［敦］：……図書館研究の仕方がね、現実から出発しなくてはいけないということなんですよね。外から言うんじゃなくて、自分のところで問題意識を持って、そういう問題をどう解決するのかということから出発する。……利用者にサービスするという観点からそれを問いただしてみればいろいろ問題があるし、……もっと広く利用してもらうか、そのためにはどうしたらいいか、仕事の中でそれを考えていく手だてを中小レポートは作ったんじゃないのかなあ。そのやり方を学んでもらうことなんですよね。本当に 180 度それまでの考え方を変えたって言えると思うんですよ。何となくずっと伝統的にやってきたことが正しいんだと思ってきたけれども、いざ利用者の側に立ってみればおかしなことがいっぱいある。（オーラルヒストリー研究会編『《中小都市における公共図書館の運営》の成立とその時代』日本図書館協会，1998，p.83-84.〈インタビューは 1993 年〉）

３　「図書館史」をどのように準備したらよいか？　【課題を克服するために】
３－１　「図書館史」はどのように構成されているか
３－２　目的の明確化
３－３　歴史にどう向き合うか
３－４　資料について
３－５　どこからはじめるか！

３－１　「図書館史」はどのように構成されているか

「館史」は、刊行の目的によって、構成がことなる。また、館に独自の史料があるかどうか、作成の蓄積があるかどうか、スタッフ、予算なども当然大きな要因となろう。ここでは、まずは、形として現れたモノを検討してみよう。

（１）「館史」の形態

公表の形式　単行本　／　小冊子　／　発行物の一部に掲載
構成　Ａ　本文（本編）＋資料（＋年表）で構成
　　Ｂ　年表

（２）タイプ

「館史」は公表の形態によっていくつかのタイプに分かれる。以下奥泉が独断と偏見にもとづいていくつかのタイプに分類する。

Ａ　本格派

図書館の歴史的経過を体系的に整理、記述する。詳細な検討、記述がなされる。

＊『神奈川県図書館史』神奈川県立図書館　1966　472p
＊『千葉県図書館史』千葉県立中央図書館 1968　516p　（「神奈川県図書館史に負うところが多かった」と「はしがき」にあり）
＊『八戸市立図書館百年史』八戸市立図書館　1974　594p

Ｂ　ビジュアル系

近年刊行される多くの図書館史に見られる。図版が多くレイアウトに工夫。見やすさ、親しみやすさをアピール。一方で記述に概説的な傾向が見られるか。

＊『大分県立図書館百年史』大分県立図書館　2005　190p（本文では見開き左ページに年表を置き、その理解のために右ページに資料、図版などを配する工夫）
＊『茨城県立図書館 100 年の歩み』茨城県立図書館　2003　100p

Ｃ　折衷派

上記ＡとＢの相半ばした性格を有するもの。

＊『100 年のあゆみ：　宮崎県立図書館 100 周年記念誌』宮崎県立図書館　2002　239p
＊『深川図書館 100 年のあゆみ』江東区教育委員会　2009　71p

Ｄ　正統派（資料が充実）

資料が充実（歴史的な判断基準に従って資料を編集）。選択する者の歴史観が問われる。図書館史研究にとっての基本資料となるもの。

＊田村盛一『山口図書館五拾年略史』山口県立山口図書館　1953　227p（「後日の参考の一助」となるよう「主観を交えた批判は避け、当時の記録を集載する」との編集方針を記す）

＊『秋田県立秋田図書館沿革誌　昭和 36 年度版』秋田県立秋田図書館　1961　278p（「沿革誌を単なる過去を回顧するための史書とすることなく、本館の輝かしい伝統を基盤とする将来の大秋田県立秋田図書館実現の基礎資料たらしめるよう努めたい」と「はしがき」にあり）

Ｅ　年表派

年表を独立して公表。本文と対になる場合が多い。

＊『宮城県図書館年表』宮城県図書館　1981　36p（別に『宮城県図書館百年史』刊）

＊『秋田県立秋田図書館史年表』秋田県立秋田図書館　1990　144p　（90 周年、別に『100 年のあゆみ』刊）

３－２　目的の明確化

誰が、何のために、「図書館史」を準備するのか？　を考えたい。

主体はだれか？　「記念」事業の一環として「館史」に取り組む、これは、ご祝儀、とばかりは言えまい。ひとつの区切りという考えもある。作成機会ととらえればそれでよい。

では、何を書くべきか？　図書館の使命。図書館の社会的な役割。利用者にどのように向き合ってきたのか、応えてきたのか、それに歴史的な評価を加える。

普通の図書館史とのちがいは何か？　書き手が当事者であること。同時に図書館員＝研究者ではないこと。動機・目的も研究対象ではなく、著作物（完成品）は研究成果ではない。では何なのか？　どういうものであったらよいのか、という問いが大切ではないか。

（１）永末氏の見解

以下に永末のレビューから「館史」についてのコメントを記す。また、アメリカの図書館史研究者川崎良孝氏の見解を合わせて紹介する。これらから「館史」がどうあるべきかを考えたい。

> 標題を「＊図書館＊年史」としても、歴史的な経過よりは、事象の列挙または各部門の運営についての要覧的記述が多く、そのまま図書館史の研究書といい難いが、地方図書館研究の史料となるまたなり得る記録ではある。（中略）
>
> これら「館史」を通覧すると、それを事務的な資料以上のものにするのは、図書館の規模よりは当事者の見識と熱意、それに加えて図書館職員の主体的な参加が大事な要素であるのが肯ける。（永末十四雄、前掲誌　p.1-3.）

図書館は、史料をもっている。その重要さに気づき、それを生かすこともできる。

（２）川崎氏の見解

川崎良孝は、ウォルター・ホワイトヒル『ボストン市立図書館 100 年史：栄光、挫折、再生』（日本図書館協会，1999）の「訳者あとがき」で、一館史の問題点についてふれている。

> 筆者［川崎］はこれまでいわゆる一館史（というよりも記念誌型の一館史）をことあるごとに非難してきた。それは以下のような理由からであった。一館史はおうおうにして、30 年、50 年、100 年といった時を意識して出される場合が多く、執筆者もその図書館の館長とか幹部といった場合が多かった。そうした業績の多くは好ましい出来事を大きく扱い、一方、問題点や逆境の時代はさらりと扱われたり、そうでなくても結局は克服されるのである。また図書館の内的発展だけを追い、それが社会の中で果たしている役割を看過する場合が多かった。もちろん視点、問題意識、方法、資料の収集の点で問題がある業績も多かったのである。(p.381-382)。

３－３　歴史にどう向き合うか

私は、先の『現代の図書館』の最新号に次のように書いた。

「歴史を研究するためには、事実を裏づける史料を解釈したり、批判したり評価することは避けて通れない。社会が変化するなか、地域の人びとに対して図書館がどのようなサービスを利用者に提供してきたのか、図書館員が自ら史料を選択し、批判的に向き合い、解釈や評価の妥当性を検証する姿勢こそが求められる。これは歴史の書き手にとって超えなければならないハードルである。」

（１）批判し、評価すること

これはたとえばどういうことか。ひとつは、現在の自分の仕事を相対的に見てみること。次に社会のなかの図書館の役割を考えてみること。さらには現在の図書館のあり方を、歴史のなかに置いてみること。そのようにして自分がいる部分から全体を俯瞰してみること。そこから、現在の図書館のあり方、自らの仕事の妥当性を検討すること。そういうことではないか。

大阪府立図書館の場合、すでに「五十年史略」があった。それは資料を中心に編纂されたもの。それから 50 年後、新たに現在を「相対化」して再評価する意図で編纂された。**【資料６】『中之島百年』の書評**（奥泉による）

（２）竹内悊解説『図書館の歩む道』を読んで歴史認識を知る

当たり前だと思っている（知っている）ことを改めて考え直してみる（わかること）。ここでは、開架の問題を例にして考えてみたい。そうすることによって、サービスと図書館計画、建築との関係などがわかるのではないか。

竹内悊解説『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』（日本図書館協会 2010）によって、ランガナタンの図書館の五法則を見てみたい。開架については、第三、

四、五法則でふれている。

第三法則《いずれの本にもすべて、その読者を》

「開架制」はこの章の初めに位置する。「読者が本を自分で見つけるようになったこと」が大事なことだと指摘する（p.193）。「沿革」には、なぜ開架制が生まれたかを記す。「読者の大多数は、自分が求めているものが何かよくわかっていないことと、……本のコレクションを見て歩き、本を手にとって見て、自分が何を必要としているかがだんだんわかっている、そのことに図書館員が気づいたからです」と（p.194）。

第四法則《読者の時間を節約せよ》

ここでは、「閉架」システムにより利用者が空費する時間を原価計算。それが亡失などよりも重視される。開架制の出現で、カウンターでの待ち時間、厄介な目録を引く無駄を最小限とする過程を説く（p.220-221）。ところがそれだけか。書架への本の排架、ガイドへも言及する。

第五法則《図書館は成長する有機体である》

ここでも開架制が言及される。「従来の書庫出納式では貸出の増加に対応できません。開架制が第五法則の要求に絶え得る唯一の方法」だとされる。同時に本の持ち出し防止、つまり安全対策についても記す（p.256-257）。

（３）サービスがどのような経過で現在に至ったのか！

竹内氏は、注に「今日開架制が普及したのは図書館法による司書養成、学校図書館での開架制採用、日野市立図書館をはじめとする新しい図書館運営法の普及などが大きな力でした」と記す（p.213）。サービスが普及した経過を知り、その意義を認識することが必要。この重要さが指摘されている。その当時の状況を見ておこう。**【資料７】開架の状況**（奥泉、小川による）

３－４　資料について

客観的な史実を明らかにするために、史料を収集、これらを解釈、評価することが必要。この一連のプロセスを史料批判という。では、どのような資料によって図書館史を構成するのか？　たとえば、図書館報、協会報　要覧、パンフ、利用案内　雑誌記事、新聞記事。さらには、図書館の業務日誌、図書館員の日記、利用者の手記なども。

（１）史料の重要性

2007 年、「エビデンスベーストアプローチによる図書館情報学研究の確立」とのワークショップに「図書館史研究」が取り上げられた。ここで三浦太郎は、「日本における図書館史研究の概況」について延べ、図書館史におけるエビデンス（証左）について、

第 1、史料を収集し、それらを批判的に検討し、歴史的な事象を構成すること

第 2、研究対象である図書館現象を、研究者の問題意識に基づいて、解釈、構成していくこと、

と課題を整理した。その上で、そのためには新たな史料収集が求められるとした。

（２）史料を伝える

小黒浩司は、「日本図書館研究会オーラスヒストリー研究グループの活動について」と題して発表し、史料の限界を補う方法に聞き取り調査があることを指摘、オーラルヒストリーの例にいわゆる「中小レポート」に関する調査をあげ、「徹底的な関係資料の収集とその分析」を行った上で、「疑問点を整理して質問項目」を組み立てる意味を述べた。一方で、図書館における記録・文書の作成と保管に関する問題意識が不足していることと、その非公開性を批判した。

図書館史研究に対する問題意識の高まりと史料発掘とは表裏の関係にあるといってよいであろう。しかし、必ずしもすべての資料が公開されているわけではない。ある館では、資料保存を理由に公開をためらうかもしれない。無関心なのかもしれない。それでは、史料を共有できないし、伝承もできない。貴重な史料を廃棄や不明から守るには、館員の研修などにより、問題意識を共有し、適切な対策が施されることが求められる。**【資料８】図書館史研究にとってエビデンスとは何か？**（三浦、小黒による）

３－５　どこからはじめるか！

記録することによって、事実を残す。そこがスタートライン。さらに知りたいことは何なのかを検討し、調査する。その結果を記録する。

（１）記録をし、それを蓄積

あるサービスを例にとる。そのサービスがいつから、いかなる理由で導入されたのか。発案者はだれか、それは、どこから、どのような経路によってもたらされたのか、または何から影響を受けたのか（図書館員による組織的な活動、図書館運動など）、その後、そのサービスは、深まったのか、利用者に浸透したのか、さらには見直しは行われているのか。利用状況の変化はどうかなど。図書館の運営方針が利用者にどのように受け止められたのか。検証をしているのか。それはどのような方法で。結果はどうかなどについてわかることが重要。

Ａ　自館の印刷物から

「館史」以外で、「館史」の参考となるような印刷物には、「要覧」「館報」などがある。それに情報を記録しておくと、後年の資料となり、「館史」となる。影響関係を確かめたわけではないが、「館報」に「館史」が掲載される例は少なくなかった。東京市立図書館の例が最初かはわからないが。

＊ STU「東京市立図書館の話 (1) - (3)」『市立図書館とその事業』9、11-12 号　1922.11、1923.3

→？『五十年紀要』東京都立日比谷図書館　1959　103p　→？　『東京都立中央図書館 20 周年記念誌』東京都立中央図書館　1994　105p（後に「三十年史」）

＊浦安市立図書館「浦安市立図書館障害者サービスの歩み」『うらやすのとしょかん』30 号　1995・春

＊同館「浦安市立図書館の軌跡」『うらやすのとしょかん』34 号　1998・春？

→？　『図書館概要』、HP に「沿革」

Ｂ　研究・研修における「発表」など

研究・研修の一環として自館の「事例報告」などを発表する機会があるはず。それを積極的に行い、なるべく記録として残すようにする。館員自身の問題意識を継続させる。これらが、「館史」のある部分を構成することも。

＊仲田憙弘「大阪図書館協会事歴小稿」『大阪府立図書館紀要』21 号　1984.11　p.7-15

＊多治比［郁夫］「『大阪人文会』覚え書」『なにわづ』72 号　1978.12

→　『中之島百年：大阪府立図書館のあゆみ』大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会　2004　474p **【資料９】『中之島百年』資料構成**

注　必ずしも上記の資料が「百年史」に使われているというわけではないが。

Ｃ　発行・発表することの意義

資料を読む。自分の体験したこと以外のことを調べる。公表により、批判を受け、改善することを学ぶ。。

図書館業務は、ある一部を担当していたとしても、全体を俯瞰していないと対応できない。館内で仕事を継承できる。

記録を公表・発表する技術を身につける。作業過程は、次のとおり。

企画・立案（予算）、情報の収集・整理、研究・調査（を伴うことも）、情報の精度の検証、著作（文章化）、校正、レイアウト（活字の指定なども）、印刷・製本（納期）、頒布（頒布先、印刷物）、原稿依頼（執筆者の選定、期日の設定）

（２）過去の蓄積を生かす

記録し、公表したものを集約すると「館史」となる。その蓄積を生かし、新たな「館史」が生まれる。館によってそのレベルがことなるが、方法はそれほど差はないか。

Ａ　前史の蓄積がある例　その１

「＊＊年史」が〇〇年後に「＊＊年史」となる例。使われている資料を見ると前の「館史」を踏襲しているが、編集方針など必ずしも同じとは限らない。

＊田村盛一『山口図書館五拾年略史』　山口県立山口図書館　1953　227p

→　『山口県立山口図書館 70 年のあゆみ：1903 ～ 1973』同館 1973　44p　→『100 年のあゆみ：山口県立山口図書館開設 100 周年記念誌』同館 2004　1 冊

＊『深川図書館史調査報告書』江東区立深川図書館　1994　179p

＊『深川図書館解体記録調査報告書』江東区教育委員会　1994　86p

→　『深川図書館 100 年のあゆみ』江東区教育委員会　2009　71p

注　江東区立深川図書館は、2008 年度に 6 名によるプロジェクトを立ち上げ、年度の終わりに「100 年史」作成の方針を固め、12 月に方針発表。2009 年 8 月刊、と短期間で作成。編集を担当した千葉裕子は「これ［2 報告書］をもとにその典拠となった原資料を確認しながらの執筆は、それでもかなりの労力を費やしたが、この 2 つがなければ、ここまで短期間での編集はまず不可能であったろう」と記している（「『深川図書館 100 年のあゆみを編集して」『みんなの図書館』398 号　2010.6

p.69-72)。なお、西村彩枝子によれば、少なくとも準備には「3 年」が必要であり、「基本方針」の決定が重要であるとしている（西村彩枝子「深川図書館 100 年のあゆみを編纂して」[日本図書館文化史研究会 2010 年度第 1 回例会レジュメ（2010.6.19)])。

Ｂ　前史の蓄積がある例　その２

元は個人による作成？　非公式な資料？　かは不明だが。そのように感じられる資料があり、それが後年生かされたと感じられる例も。影響関係を確かめたわけではないが。

＊池浦正春編『70 年の歩み：和歌山県立図書館沿革小誌』和歌山県立図書館　1976　274p（手書きの原稿を製本、資料の典拠が記載）

→？　『和歌山県立図書館百年の歩み　そして、次の一歩へ』和歌山県立図書館　2008　99p

＊『大阪市立図書館の歩み：明治 27 年～昭和 35 年、昭和 36 年～平成 3 年』大阪市立図書館貴和会事務局　[1991]（貴和会の著作はこれだけ？　親睦団体？　2 分割されている前の部分は 1960 年まで。「50 年史」より前に作成か？）

→？　『大阪市立図書館 50 年史』大阪市立中央図書館　1972　207p

（３）モデルを選び、目標にする

モデルを選び、これに学ぶ。「よい」と思ったものをモデルにすればよい。「よい」というなかにマイナスの「条件」を加えてもよい（たとえば、予算、時間など。可能な範囲を想定することが大事)。当面は、それを真似、目標にする。その積み重ねのプロセスで欲が出てくる。さまざまなアイディア、ひらめき、思いつき、などなど。思い違い、失敗を経て、オリジナルな作品ができあがるかもしれない。できないかもしれない。けれどもやってみる。

Ａ　**『小平市立図書館30年の歩み』**小平市立中央図書館　2006　102p

「10 年」「20 年」と 10 年ごとに「あゆみ」を刊行している。「30 年」は全体で 102 ページのうちほぼ半分が「年表」。各年度の冒頭に年間の概要を記し、写真を付す。時系列にサービスなどの変化が理解できるような工夫がなされている。後半の半分は「資料」で、年度ごとの推移が把握できる。ただし、統計の分量が多いことから、利用者が同館の特徴を把握するのは困難か。**【資料１０】『小平市立図書館30年の歩み』**

Ｂ　**『調布市立図書館40年の歩み』**調布市立図書館　2008　42p

『調布市立図書館のあゆみ』[1969] のあと「20 年」「25 年」「30 年」「35 年」と 5 年ごとに「歩み」を刊行している。経過については、それまでの概要に、近年の約 5 年分を加筆する方法。「資料」は、小平とは対照的に、サービス内容のポイントを絞って、利用の変化をクローズアップさせる。「図書館運営」に対する考え方（図書館協議会）を明示して、運営組織の変遷をわかりやすく説明する。最後に年表も。**【資料１１、１２】『調布市立図書館40年の歩み』**

４　おわりに

○本格的な「館史」を作成することは、どういうことかを考えた。歴史認識をもち、史料を解釈し批判、評価をすること。批判することには責任を伴う。それは現在の自分が将来の図書館に対して負うべきもの。だから、歴史を書くということは、自らをさらす行為といえよう。自らを自らが問うこと。そのときに根拠となるのが史料、ということだ。

○次のことを語った研究者は、自らもある住民運動の渦中にいて（図書館の運動ではなく、そして、現在もそれはつづいている）、そのときの行動を振り返りながら、未来からの問いに対する自らの答えの意味を深く追求した。

「過去の歴史に学ぶ態度があれば、現在の実践が未来にどのような結果をもたらすかを常に考えて行動する能力が養われる。それが歴史を学ぶということの意味である。」（ 河井弘志「図書館の歴史と現在」（特別講演記録）『図書館文化史研究』No.25, 2008, p.44.）

そして、歴史的なものの見方、考え方というのは、図書館についても言えるのではないかとの結論を導き出した

○ランガナタンの「五法則」の解説で、竹内悊氏は「図書館現象」についてこう記す。本のコレクションは「その形成、維持、無視、破壊、再構成という力が働」（注）き、このくり返しだ、と。コレクション＝図書館ではないが、図書館はコレクションを盛る器であり、これは図書館についてもいえるのではないか。

現在、この国の図書館は、図書館現象のどこに位置するのだろうか？　仮に、現在「無視、破壊」状況の渦中にあるとする。そう考えたなら「再構成」への道をさぐればよいと思う。

「現在」も、じつは過去から未来へつながる歴史の一点。そのことを知っていれば、私たちは、いずれ後の「評価」にさらされる。それに耐えうるサービスを心がけねばならない。歴史を考えることは、時間の経過のなかでものを考えること。

注

図書館現象　人は本を集めて保管し、秘蔵したり公開したりします。本が大量になると混乱が起こり、組織化の必要が生まれました。コレクションが解体され、本が他のコレクションに入ることもあります。ここにその形成、維持、無視、破壊、再構成という力が働きます。人間は昔からこれをくり返していますから、これを図書館現象と呼んで、研究対象とします。図書館学あるいは図書館情報学はこの現象を研究し、その方法・過程・結果を明らかにしようとする学問で、究極の目的は、そういう現象を示してやまない「人間とは何か」にあるといえましょう。そこに他の学問との共通の広場が生まれます。（後略）（傍線奥泉）

竹内悊解説『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会　2010 p.27